シラク政権下におけるもう1つの美術館構想
—国立移民史博物館をめぐって—

松岡　智子
倉敷芸術科学大学芸術学部

（2011年10月1日　受理）

1．はじめに

国立移民史博物館（La Cité nationale de l'Histoire de l'Immigration）（註1.）は、ヴァンセンヌの森が占めるパリ東南部12区にあり、ポルト・ドレ駅から徒歩1分程のところに位置し、2007年10月10日に開館したばかりの博物館である（図1.）。前年6月、エッフェル塔のふもとにケ・ブランリー美術館が開館し、同月20日に開催された開会式には、各国の美術館関係者や、クロード・レヴィ＝ストロースをはじめとする人類学者、また、コフィー・アッタ・アナン国連事務総長も招かれ祝辞を述べたのち、ジャック・シラク前大統領が演説し、新聞各紙にも大々的に報道された。そのようなケ・ブランリー美術館（註2.）の華々しい出発と比較すると、移民史博物館の場合、国立の博物館にもかかわらずオープニング・セレモニーは全くなく、同年5月に大統領に就任したニコラ・サルコジや閣僚たちも一切姿を見せず、寂しいオープンであった（註3.）。

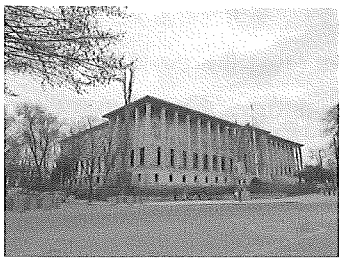

図1．国立移民史博物館の外観

パリの代表的な三大美術館と言えば、ルーヴル、オルセー、オランジュリーであり、近年ではケ・ブランリーも加わり、外国人観光客で常に館内は混雑している。実際、フランスの国立美術館の総入館者数の半分以上は、これらの美術館で占めているのに対し、移民史博物館を訪れる観光客は稀であり、むしろ、その地下にある熱帯水族館の方がはるかに知られており、週末は子供連れの家族の憩いの場となっている。しかも、上記の有名な美術館が、パリの最も華やかなカルティエに位置するのとは対照的に、移民史博物館のあるパリ東部は19世紀以降、＜ゾーン＞と呼ばれ、ワインやくず物を扱う労働者や浮浪者たちの住む不衛生なバラックが密集していた、「危険な場所」というイメージと、「植民地」の記憶を今も伝えている。

しかしながら、ケ・ブランリー美術館と同様、移民史博物館もシラク政権下の時代、構想実現に向けて計画されていた。本稿では、我が国ではあまり知られていない移民史博物館設立までの経緯と、その社会的背景を概観したい。

2．国立移民史博物館設立の経緯

(1) 起源—植民地博物館 (Le musée permanent des Colonies)

1931年5月から11月にかけて、ヴァンセンヌの森でパリ植民地博覧会が開催された。会場には、フランス館に隣接して建設された植民地博物館や情報館と、森のなかにアフリカ、アジア、オセアニアの植民地パヴィリオン群が立ち並び、舞踏や演劇を披露する原住民の展示もしばしば行われた。さらには植民地の宗主国であるアメリカ合衆国、イタリア、オランダ、ポルトガル各国のパヴィリオンの他、動物園や水族館も備え、従来のアミューズメント・パークではない、実証的な展示となるよう努めた。

1878、1889、1900年のパリ万国博覧会でも植民地パヴィリオンは大成功を収めており、また、地方都市ルアン (1896年)、マルセイユ (1906、1922年)、ボルドー (1907年)、ルーベ (1911年) での博覧会でも、植民地の展示がすでに行われていた。しかし、こうしたこれまでの大衆娯楽的で商業的な内容とは異なり、1931年に開催された植民地博覧会の目的は、「人々に植民地政策の成果や、現在の植民地の真の姿と未来への展望を一堂に開陳する」という教育的・啓蒙的なものであり、植民地博物館も、フランスの植民地政策の記念碑的な恒久的施設として、建設されたのである。

古典派アール・デコの様式の第一人者であった、建築家アルベール・ラプラドの設計による建物は、第一次世界大戦後のフランス建築界が古典主義に回帰してゆく傾向を示していった、初期の建築に位置づけられる。そのファサードには壮大なレリーフがほどこされており、同じく古典派アール・デコの様式で知られ、ブールデルの弟子だった彫刻家アルフレッド・ジャニオによるものである (図2.)。ジャニオは高さ13メートル、長さ100メートルにも及ぶ「石造のタピスリー」の下絵と制作に3年を費やした。1年目は様々なスケールによる全体構成のスケッチを試み、2年目は半分のスケールで粘土モデルを作成し、3年目に助手とともにレリーフを完成させた。

図2．アルベール・ラプラド (左) とポール・ジャニオ (右)

レリーフの中央にフランスを象徴する神々や港湾都市を配し、その周囲をアフリカ、アジア、オセアニア、アメリカの大陸が取り囲むというものであり、フランスの港湾都市の下には肉体労働をする原住民の姿が描かれている。そして、それらの人体のポーズはアカデミックではあるが、人種的な特徴をよく観察し的確に表現している (図3.)。また、パリ中心部に面した建物の西側面には、中世十字軍から第三共和制までの、フランス植民地帝国成立に貢献したすべての人物の名前が刻まれ

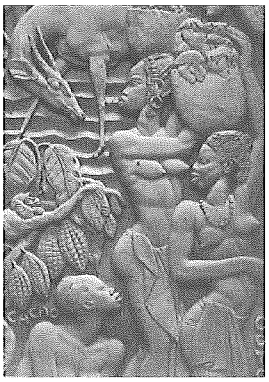

図3．ポール・ジャニオ「カカオと綿の文化」(レリーフの一部)

た。

ラプラドは博物館の内部を地階、１階、中２階、２階の４層で構成し、１階には、講演や会議、パフォーマンス等が行われる祝祭の間（図4.）と、フランス芸術と文学が植民地から受けた影響に関する展示室などを設け、植民地主義の歴史部門の展示も行われた。また、中２階では、「前史と植民地の民族学と原住民の芸術」が展示され、２階では当時の植民地の組織や生産物に関する展示が行われたが、いずれの展示も体系的なものではなかった。また、２階には、植民地の影響を受けた作品の研究に関する資料室が設けられ、研究者や専門家への情報提供も行われた（註4.）。

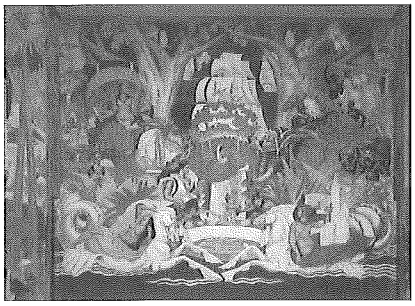

図４．ピエール・アンリ・デュラス・ド・ラ・アイユ「フランスと五大陸」（祝宴の間の壁画）

（2）海外フランス博物館（Le musée de la France d'outre-mer）へ

植民地博覧会が終了すると植民地博物館もいったん閉館したが、最初に水族館が再開し、1932年、植民地とフランス外部博物館（Le musée des Colonies et de la France extérieure）に改称し、翌年、歴史部門と土着の芸術の部門の展示が再開した。1933年、植民地とフランス外部博物館は植民地を概括する機関と合併し、翌年、行政上の理由から、今度は国立海外フランス農学研究所（INAFOM）と合併しその配下となったため、研究所が所蔵していた資料も引き継ぐこととなり、展示の仕方も、芸術的というよりはむしろ資料展示的な性格を帯びていた。また、面積を拡張しワニを加えた水族館は人気を博し、のちに自然史博物館の監督下におかれた。

1935年、歴史部門の展示がリニューアルし、芸術と文学における異国趣味の部門も加わり、海外フランス博物館（Le musée de la France d'outre-mer）と改称された。そして、黒人芸術の部門も再開し、展示室は①フランス文学・美術における異国趣味　②十字軍以来のフランス拡張政策の歴史　③土着の芸術　④フランスの人道的役割　⑤水族館の５部門を通して、植民地におけるフランスの啓蒙的使命を高めることを目的としていた（註5.）。また、同年、マダガスカルと西インド諸島に関する展覧会が開催され、翌年、クメール美術の展示室が、また、1937年にはアフリカの新展示室がオープンし（図5.）、同年、紅茶とコーヒーの展覧会が、翌年にはカカオ、バニラ、香辛料に関する展覧会が開催された。1939年、海外フランス博物館は植民地省の監督下におかれ、第二次世界大戦中、

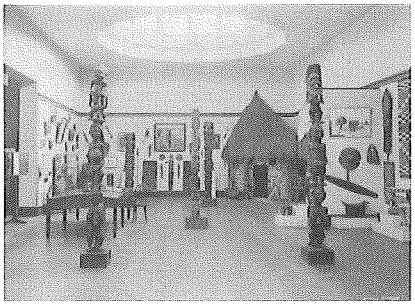

図５．「サブサハラアフリカ」の展示室、1938年頃

1940年と1944年のパリ解放の時に閉館し、1945年には、レジスタンスに関する展覧会が開催されている。

(3) アフリカ・オセアニア美術館 (Le musée des Arts africains et océaniens) の誕生

第二次世界大戦後、海外フランス博物館では、「マダガスカル」(1946年)、「奴隷廃止」(1948年)、「チャド50周年」(1951年)、「ピエール・サヴォルガン・ド・ブラッザ生誕100周年」(1952年)、「ポール・ジュヴ」(1955年)、「アンドレ・マリー」(1958年) 等、展覧会が開催された。また、1947年、ブラック・アフリカ部門が拡張された。しかし、1954年、フランスがインドシナに降伏すると、以後、世界各地で植民地政策に反対する民族解放運動がひろがり、また、アルジェリア戦争も長期化するなかで第五共和政が誕生し、重荷となった植民地経営を清算する方向への転換を迫られた。

1960年、ドゴールによって、文化を専門的に担当する国務大臣に任命されたアンドレ・マルローは、フランス海外博物館への舵取りにも結論を出した。人類博物館から美術コレクションの一部を移動することも計画され、アフリカ・オセアニア美術館 (Le musée des Arts africains et océaniens) と改称して再生させ、植民地省から文化省の管理下におき、その目的を「植民地であった国々の芸術と文明を知り、ヨーロッパ近代芸術におけるその役割を認識すること」とした (註6.)。そして、最終的に Arts Premiers のための大美術館を設立する構想へ導いたのは人類学者たちであり、1963年に設立された収蔵品購入のための委員会にはクロード・レヴィ＝ストロースも参加していた。

この新たな美術館は、植民地の過去から解放されることと、第二次世界大戦後、人類学研究所へ移行した人類博物館とは明確に異なる立場をとる必要があることという、2つの課題に直面していた。また、マルローのプロジェクトを完全な形で実現するためには、アメリカ先住民の展示を放棄し、アフリカとオセアニアを残す必要があった。当初の学芸員はアフリカ担当のドニス・ポルムと、オセアニア担当のジャン・ギアールでともに人類学者たちであり、その後、前者の後任として、マルローと親しいコートジボワール美術の鑑定家ピエール・モーゼが就き、作品の収集を行った。そして、1967年、マグレブ (北西

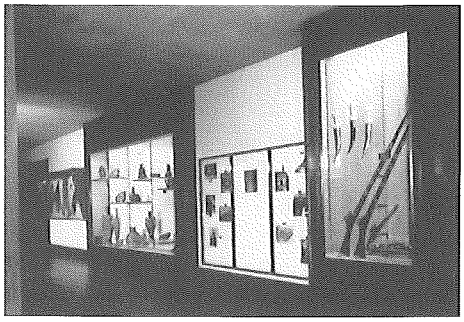

図6.「マグレブ・コレクション」の展示室、1967年頃

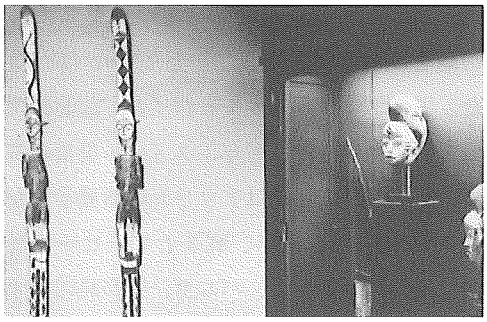

図7.「サブサハラアフリカ」の展示室

アフリカ諸国）美術部門が新たに登場し（図6.）、翌年、中2階のサブサハラアフリカの2つのギャラリーがリニューアルされ（図7.）、1970年、歴史に関するギャラリーは閉鎖された。しかし、美術市場の構造とコレクションに関する専門性を反映し、オセアニアと比較すると、アフリカ美術のコレクションで重要なものは希少だった。

（4）国立アフリカ・オセアニア美術館

（Le musée national des Arts d'Afrique et d'Océanie, Le MNAAO）

1971年、アフリカ・オセアニア美術館はようやく国立のミュージアムとなった。1階にはメラネシア美術や樹皮に描かれた絵画（クプカ・コレクション）が展示された。そして、1975年以降、アフリカ展示室が増加し、最上階には、1973年に主任学芸員となったオラニエ・リオトットと、1976年にピエール・モーゼの後任となったC.ノイルの尽力により収集された、マグレブの類まれな装身具と織物のコレクションが展示された。また、1973年、オセアニア部門の新たな展示室が、翌年、古代マグレブの展示室が新たにオープンした。このような積極的な美術品収集によって、常設展示室が充実していったにもかかわらず、国立アフリカ・オセアニア美術館は、他の代表的な美術館の学芸員たちに無視され、市民の多くもコレクションを認知せず、マスコミや大衆の目には相変わらず「植民地の美術館」として映っていた。

しかし、1980年代初め、アール・デコ様式への関心が高まったため、国立アフリカ・オセアニア美術館の建築や装飾にも注目が集まるようになった。そのため、植民地博物館が設立された時、1階に作られたポール・レノ植民地大臣とロティ元帥のサロン（図8.）が、再び公開された。また、1987年、祝宴の間が改修され、その部屋に展示されていたフレスコ画も修復された。また、1980年代から、美術館はアフリカ・オセアニア芸術の保護と紹介のための協会（ADEIAO）と共同し、現代作家の展覧会を開催するようになった。1989年、ポンピドゥー・センターとラ・ヴィレットで「大地の魔術師」展を企画したジャン・ユベール・マルタンが館長に就任すると、現代への関心をさらに強化し、「五大陸のギャラリー」展（1995年）、「アルマンとアフリカ芸術」展（1996－7年）、「アネット・メサンジェ」展（1998年）を企画した。そして、1990年にはフランス博物館局の管理下におかれた。

図8. ロティ元帥のサロン

（5）1990年代末から閉館まで

1999年、ジェルマン・ヴィアットが館長に就任すると、「ヨーロッパとオセアニアの聖遺物」展（1999－2000年）（図9.）、「カニバルとバニエ」展（2001－2002年）、「Ubuntu:

南アフリカの芸術と文化」展（2002年）が開催された。また、1999年、マグレブの展示室がリニューアルされ、2002年、植民地博物館入り口の前に設置された、ダイアモンドの先端の形をした金色の葉形飾りをほどこされた、ジャン・プルヴェ作の鉄柵の門の修復を行った。

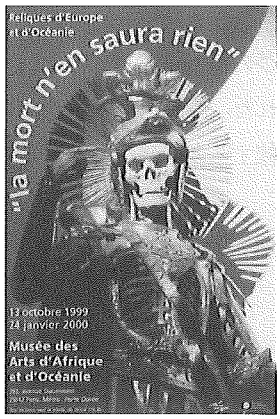

図9．「ヨーロッパとオセアニアの聖遺物」展のポスター

その一方で、1998年、ルーヴル美術館内のパヴィヨン・デ・セッションにArts Primitifsのための常設のギャラリーを設けることが、正式に決定し、2000年4月、アフリカ、オセアニア、アジア、アフリカの造形120点余りが、セーヌ川に面したギャラリーで公開された。さらに、シラク前大統領は1998年、セーヌ左岸の2万5千平方メートルの国有地に、Arts Primitifsのための美術館を建設することを公式発表し、そのために、人類博物館と国立アフリカ・オセアニア美術館のコレクションの大部分がほぼ強制的に吸収された。その結果、アフリカ・オセアニア美術館は2003年、閉館し、2006年6月、ケ・ブランリー美術館が開館するのである。

3．国立移民史博物館（La Cité nationale de l'Histoire de l'Immigration, La CNHI）の誕生

(1) リニューアルされた博物館

国立アフリカ・オセアニア博物館閉館の翌年から、建築家パトリック・ブシャンとロイック・ジュリエンヌにより、建物内部のリニューアルを手掛けることが公式に決定した。この建物が歴史記念物に指定されたため、基本的にはラプラドによる当初の基本的なプランを踏襲したが、植民地の歴史を彷彿させる威圧的な空間、例えば、功労者に敬意を示すために設けられたサロンは、ライブラリーやカフェテリア、受付、レジに替えられた。また、長らく閉鎖されていた、1階にある威厳に満ちた「祝宴の間」は、入り口のホールに開かれた、くつろげる待合所となり、同じ階には、講義室や様々な団体のための会議室も設けられた。また、植民地博覧会が開催されていた期間、刑務所として使用されていた地下の中庭のスペースには、非常階段やエレベーター、給排水設備、クローク、機械室が新たに設置された。

(2) 常設展示室

Repèresと名付けられた、1,100平方メートルほどの常設展示室の入り口に立つと、天井から吊り下げられた大きなパネルが目に入る（図10.）。そこには、19世紀以降の世界の人口移動が世界地図上に示されており、さらに進んでゆくと①移住　②政府の対応　③フランスと

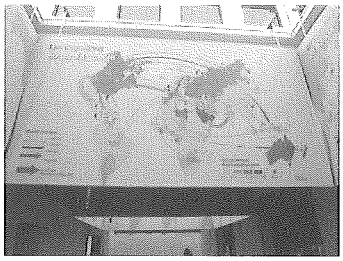
図10．「20世紀末の移動」

図 11. ロバート・キャパ「ル・バルカス（ピレネー・オリエンタル）のキャンプに移動するスペイン難民」

図 12. 無名の移民のスーツケース

図 13.
「科学アカデミー会員に推挙されるキュリー夫人」（『エクセルシオール』紙、1910 年 2 月 12 日付）

祖国　④移住後の生活　⑤移民の仕事　⑥定住　⑦スポーツ　⑧宗教　⑨文化　のテーマ別に、写真などの映像、文献資料、移民の遺品、造形作品等の展示資料と解説文が展示されている。以下はその概要である（註 7.）。

まず①では、ヨーロッパのみならず、アメリカ、アジア、アフリカから労働者、技術者として、また政治的な理由などから移住する外国人を写真等で紹介している（図 11.）。祖国を旅立つ時に、移民が持ち運んだ遺品のスーツケースが、パスポート、家族の写真、仕事道具、宗教的儀式に必要なものなどとともに、展示されている（図 12.）。19 世紀初頭まで、外国人は自由に入国し滞在することができたが、第一次世界大戦以後、正式な身分証明書が義務づけられた。そして、彼らは労働力・戦力として必要とされ、その後、パリ解放とともに本格的な移民政策が行われるようになり、現在のような社会的統合の危機を迎えるまでの経緯を②では示す。さらに、③では、移民たちが祖国とフランス両国とのつながりを保ちながら、独自のコミュニティを形成し新たな人生を送る姿を紹介し、④では、多くの移民は、当初から劣悪な環境のなかで生活しており、1945 年以降、政府の政策により、低所得者のための住居が郊外に建設され、住環境はかなり改善されたが、新たな疎外を生み出している現状を伝えている。そして、⑤では、過酷な労働を強いられていた多くの移民労働者たちが、1960 － 70 年代以降、団結して労働条件の改善を訴え、また、差別と闘うようになり、⑥では、移民たちがフランス語を学び学校教育を受け、家庭をもち国籍を取得してきた結果、定住移民となる過程を紹介する（図 13.）。

また、展示室の後半にあたる⑦以降からは、2 世紀にわたる移民の歴史がフランス社会にもたらした遺産として、スポーツ、宗教、文化の分野での事例を紹介している。⑦では、19 世紀初頭以降、スポーツの分野における移民の貢献について（図 14.）、さらに、⑧では、移民の文化的アイデンティティとして宗教を取り上げる。移民社会において、1914 年ま

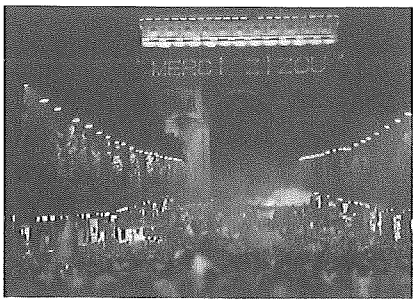

図 14.「メルシー・ジズ（ジダン）」（1998 年、ワールド・カップでのフランスのサッカー・チームの初優勝を祝し、ジダンの名がパリの凱旋門に映し出された。）

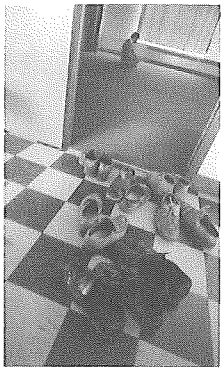

図 15.
1979 年、ルノーの自動車工場内に、イスラム教徒の労働者のために最初に設けられた、祈祷のための部屋

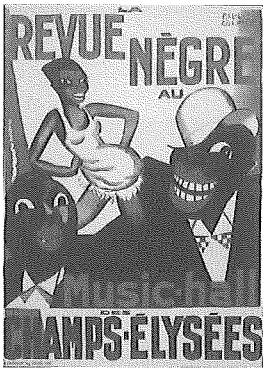

図 16.
パリのシャンゼリゼ劇場での黒人レビューのポスター（中央がジョセフィン・ベーカー）

ではキリスト教とユダヤ教が中心だったが、1926 年に初めてモスクが設立された後、現在ではイスラム教が第二の宗教となり、「ライシテ」（laicité, 脱宗教性）（註 8.）を前提とし、その他仏教なども含めた信仰の自由を認めている現状を紹介する（図 15.）。最後に⑨では、芸術的・政治的理由からフランスに移住し活躍した、多数の外国人芸術家、小説家、音楽家などを紹介する（図 16.）。ショパン、ゴヤ、ピカソ、シャガール、キャパ等、数多くの人物が名を連ねるなかで、日本人では、洋画家藤田嗣治とファッション・デザイナー高田堅三が紹介されている。

4．社会的背景

2004 年の統計によると現在、フランスの人口は 6,052 万人で、国民の約 25 パーセントは外国で生まれた親ないし祖父母をもっていると推定されている。移民とは、外国で生まれて、出生時にフランス国籍を持っていなかった人のことを言う。一度フランスに入国して国籍を取得すると、フランス人になることができ、その場合はフランス人移民の身分になる。あるいは自分の国籍を捨てず、外国人移民（フランス国籍を取得していない移民）の身分でいることもできる。ただし、外国で生まれたフランス人や、移民の両親からフランスで生まれた子供たちは、自分から異議を申しでない限り、自動的にフランス人になる。現在、移民の数はおよそ 493 万人で、人口の 8.1 パーセント程度に相当し、移民の 3 人に 1 人以上がフランス人である（註 9.）。

フランスは 19 世紀半ば以降、ヨーロッパ諸国からほぼ継続的に移民を受け入れてきたが、1970 年代にはアラブ諸国からの移民が主流となり、周辺諸国よりも移民の「第 2 世代」及び「第 3 世代」の割合が多い。そして、21 世紀に入ると中国やアフリカ・サブサラ地

域からの移民が急増しており、現在のフランスは、日本人がイメージする「フランス人」の住む国とはかなり異なっている（註 10.）。

自身もハンガリー系移民２世であるにもかかわらず、2006 年７月、内務大臣だったニコラ･サルコジは､移民の質と量を管理するための新移民法を成立させた（註 11.）。そして、2007 年、大統領に就任すると「移民・統合・国家アイデンティティ・共同開発省」を創設し、オルトフ移民大臣に対して、フランスの経済・社会的発展に寄与する移民を移民全体の 50％まで引き上げるよう通達を出した。そして、同年 11 月には、家族の呼び寄せの条件の厳格化を図る法律を成立させた。この法律は、入国前（ビザ取得前）のフランス語の取得及び共和国的価値の理解の義務化、家族の呼び寄せにおける DNA 鑑定の導入等を行うものであった。また、滞在許可証を持たない移民の国外撤去を求めるとともに、2007 年末までには２万５千人を退去させるという数値目標を発表したのである（註 12.）。

しかしながら、前述した「移民・統合・国家アイデンティティ・共同開発省」が創設された 2007 年５月 18 日、フランスにおける移民研究の第一人者で、国立移民史博物館設立を政府に働きかけ尽力してきたジェラール・ノワリエルやパトリック・ヴェイユらは、この博物館の顧問を辞任し、サルコジの強硬な移民政策に対して抗議の意志表示をした。

移民たちの歴史を伝えるための博物館構想は、歴史家たちや活動家たちによって 20 年ほど前から発案されていたが、2001 年、シラク政権下、リオネル・ジョスパン左派連合内閣がエル・ヤザミとレミ・シュワルツに報告書を依頼したことによって、ようやく具体化し始めた。そして、翌年、大統領選で再選を果たしたシラクが公約したことで、実現に向けて本格的に稼働することとなり、ジャック・トゥボンが中心となり、歴史家や活動家たちとともに調査と移民に関するセンターを創設することを依頼した。また、建設予定地についてもベルシーの旧アメリカ・センターやラ・デファンス、シャイヨー宮など、幾つか候補が挙げられたが、2004 年、政府は、ポルト・ドレ宮を改装して博物館を設立することを公式に発表した。そして、2006 年、フランスにおける２世紀にわたる移民の歴史をできる限り多くの人々に知らしめ、移民に対する視線を変え、社会的統合政策へ貢献するための公施設法人となった。しかし、建物のリニューアル工事が長引いたため、シラク政権下で完成した姿を見ることはできなかった（註 13.）。

その一方で、2005 年 10 月、パリ郊外で、警察の職務尋問を受けたアフリカ系移民の少年２人が変電所に駆け込み感電死したことがきっかけとなり、フランス各地で移民たちの暴動が起き機動隊と衝突し､真夜中に各地で自動車が炎上する映像が世界中に発信された。この時、サルコジが暴動を起こした若者を「社会のクズ」と発言したことが問題となった。また、翌年４月、新移民法案の撤回を要求して、パリのシテ島に位置するサント・シャペル礼拝堂内を数十名のアフリカ系移民が占拠し、続く７月、わが子の就学証明書を手にし、正規化を求める数十人の「サン・パピエ」（正式な滞在許可証をもたない人々）の家族が、警察署前に連日列をつくるなどの抵抗が続いた。そして、移民史博物館は最初の構想から

20年近く経たのち、移民規制を強力に推進したサルコジの大統領就任直後に、皮肉にもオープンすることとなったのである。

5．おわりに―「他者」化を超えて

国立移民史博物館は、移民の所有物や歴史的資料の展示を行う資料館にとどまらない。現代作家による美術展や「国家を再建する―近東とフランスのアルメニア難民 1917～1945年」展（2007年11月～2008年1月）、「1931年―植民地博覧会の時代の外国人」展（2007年10月～2008年1月）、「サッカーと移民―交差する歴史」展（2010年5月～2011年1月）、「Polonia. フランスにおけるポーランド人」展（2011年3～8月）等の企画展も開催されている。また、他にも演劇、フェスティバル、講演会などを随時行ったりするなど、開館以来、活発に活動を続けており、移民についての関心を高めるための、芸術性を備えたミュージアムとして認識されつつある。

シラク政権下、この国立移民史博物館の他に、2006年に開館した＜非ヨーロッパ＞芸術によるケ・ブランリー美術館と、2013年にマルセイユに開館予定のヨーロッパ・地中海文明博物館の3つの国立のミュージアムが構想されていた（註14.）。ケ・ブランリー美術館が開館した2006年、首相の下に置かれた諮問機関である高等総合審議会（HCI）は、『2002～05年の統合政策の総括』と題する報告書を首相あてに提出し、その中で、新たな課題として、オーディオ・ヴィジュアル（メディア）の領域における「文化的多様性」の実現の必要性を提示している（註15.）。

先に挙げたシラク政権下に構想された3つのミュージアムもまた、＜非ヨーロッパ＞、＜移民＞という「他者」化を超え、困難な課題ではあるが、文化主義的「統合」への実践的活動に着手し始めている。

註

1）<La Cité nationale de l'Histoire de l'Immigration>は、日本では国立移民史記念館、国立移民歴史館などと訳される場合もある。19世紀初頭以降の移民の歴史、芸術、文化に関する国のコレクションを保存・展示する施設であり、企画展も開催されており、本稿で筆者は国立移民史博物館と訳した。

2）ケ・ブランリー・プロジェクトについては、以下の文献を参照。Sally Price, *Paris Primitive*, The University of Chicago Press, Chicago & London, 2007. 松岡智子「ジャック・シラクの美術館構想に関する一考察」『倉敷芸術科学大学紀要』第16号、2011年3月、25-36頁。

3）「パリの移民記念館ひっそりオープン―シラク氏指揮、すでに退任」（『朝日新聞』2007年10月12日付）。

4）パリ植民地博覧会については、以下の文献を参照。パトリシア・モルトン、長谷川章訳『パリ植民地博覧会―オリエンタリズムの欲望と表象』ブリュッケ、2002年。

5）ジャック・サロワ、波多野宏之・水尾信之『フランスの美術館・博物館』［文庫クセジュ867］白水社、2003年、33-34頁。

6）同上、34頁。

7）国立移民史博物館の歴史や建築物、コレクション等については以下の文献を参照。Germain Viatte, *Le Palais des Colonies*, Éditions de la Réunion des musées nationaux, 2002. *Guide de l'exposition*

permanente, La Cité Nationale de l'Histoire de l'Immigration, <Le patrimoine culturel des migrants>, *Museum International*, édition française, no. 233-234, UNESCO, mai 2007. <La Cité nationale de l'Immigration: Quels publics?> *Hommes & Migrations*, numéro hors-série, octobre 2007.

8）「ライシテ」(laicité, 脱宗教性)：訳語と解説については、ジャン・ボベロ著、三浦信孝・伊達聖伸訳『フランスにおける脱宗教性の歴史』[文庫クセジュ936]（白水社、2009年、9頁）を参照。

9）ミュリエル・ジョリヴェ、鳥取絹子訳『移民と現代フランス―フランスは「住めば都」か』集英社新書、2003年、19頁参照)。

10）フランソワ・エラン、林昌宏訳『移民の時代―フランス人口学者の視点』明石書店、2008年、9-10、27頁参照。

11）新移民法「移民と統合」の主な内容は以下の通り。(1) 有用な技能や資格をもつが外国人を対象に、3年ごとに更新可能な滞在許可を与える制度の新設（修士号以上の学位を持つ学生には4年以上の滞在許可)、(2) 家族呼び寄せで来仏する者、及びフランス人と結婚した者への滞在許可の条件を従来より厳しくする、(3) 10年以上の滞在事実のある不法入国者に認められてきた正規化措置の廃止、(4) 長期滞在希望者にはフランス語・市民教育の受講を求める、(5) 国籍取得者には取得時に記念式典に参加させる、からなる。以上については、宮島喬『移民社会フランスの危機』、岩波書店、2006年、18頁参照。

12）平出重保「フランスの移民政策の現状と課題」『立法と調査』（参議院事務局企画調整室編）No. 293、2009年6月、5、6頁。

13）Jacques Toubon, <La genèse politique de la Cité> *Museum International*, édition française, no.233-234, 2007, p8-9. Maureen Murphy, *Un palais pour une cité. Du musée des Colonies à la Cité nationale de l'Histoire de l'Immigration*, Paris, Réunion des musées nationaux, 2007, p.59. 60. 62.

14）ヨーロッパ・地中海文明博物館（Le Musée des Civilisations de l'Europe et de la Méditerarée, Le MuCEM)の起源は、1881年にオープンしたトルカデロ民族誌博物館にさかのぼる。その後、民族学者ジョルジュ=アンリ・リヴィエールが中心となり、フランス展示室のコレクションに基づき、1972年、パリ西部のブーローニュの森に国立民芸民間伝承博物館（MNATP）が建設されたが、2005年に閉館した。そしてMNATPは、マルセイユに開館予定のMuCEMに、人類博物館のヨーロッパ部門のコレクションとともに吸収されることとなった。MuCEMは、コレクションの保存・研究・展示のみならず、出会いと討論と創造を行う生きたミュージアムとなることを目指している。以上の変遷については以下の論文やサイトを参照。松岡智子、註2の前掲論文、26-27頁。
http://www.mucem.org

15）宮島喬、註11の前掲書、231頁。

President Jacques Chirac's additional Museum Project — La Cité Nationale de l'Histoire de l'Immigration

Tomoko MATSUOKA
Collage of the Arts,
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received October 1, 2011)

La Cité Nationale de l'Histoire de l'Immigration (CNHI) opened in October 2007 in Paris. The origin of this musem was a permanent pavilion of the Colonies, created for the 1931 Colonial Exposition in Paris.

This paper gives an overview of the history of the pavilion as a memorial space, and examines museographical choices of exhibits of the CNHI which narrate the varied experiences of immigrants, considering their social and political environments.